３　木原崇雲翁小伝

「財団法人木原営林大和事業財団」の設立者木原崇雲翁は、明治 23 年 9 月 15 日愛知県知多郡河和村の貧農の家に生れた。5 才（明治 27 年）のとき母を失い、父は入婿であったので、翁が 7 才のとき北海道へ去り、爾後は、祖母の手で育てられた。祖母は、大変立派な人物であったらしく、翁は、長い間心から祖母を敬愛しておられた。祖母は、幼い頃の翁に対し、「貧乏しても手を出して物を貰うな」、「男は泣きごとを言ってはいけない」と諭し、孤児である少年を強い子に育てた。

翁は、自分に関する一番古い記憶は、自分が藁葺の粗末な小屋の中で破れた蒲団にくるまっていたときのことであるという。翁は 9 才（明治 31 年）のとき頭を強く打って気を失い、1 ヶ月もの間人事不省の状態で過した。その間、祖母は、必死に看病し、その快復を神仏に祈った。翁は、夢うつつのなかで、自分のためにする祖母の祈りの声を聞いた。翁の神仏に対する敬虔の念は、その頃から徐々にはぐくまれたものであるという。

当時、小学校は四年制であったが、翁は、小学校を 3 年までしかいかなかったらしい。祖母との生活は、極めて貧しかったので、祖母の慈しみを受けながらも、翁は、田畑で働き、冬は山でたきぎを拾い、雨の日は草鞋を作った。8 才のときの思い出だといわれるが、幼い力では藁を強く叩けないので、作った草鞋は半値にしか売れなかったという。11 才のとき、既に道路工事のバラス運びの労働にも従事している。幼い頃の荒仕事は、涙の出る程辛いものだったと、翁は、当時を回想して語ったことがある。

翁は、こうして 13 才まで祖母のもとにあったが、北海道へ去った父恋しさもあってか、14 才のとき北海道へ渡り、厚岸郡厚岸町の雑貨商に丁稚奉公することになった。たった一人の肉親である祖母の膝下を遠く離れ、異郷で奉公するということは、年端もいかぬ少年にとって、厳しい日常であったに相違ない。翁は、少年時代の厚岸の生活には、こんなこともあったよ、と話されたことがある。

店の主人夫婦は、茶の間で夕餉の牛鍋をつついていた。木原少年は、その畳の部屋より一段低い板の間で、幾切れかの漬物だけで食事をしていた。牛肉の匂は少年の鼻をつき、少年は、無性に自分もそれを食べたいと思った。主人は、それに気がついたのか、「お前もここへ来て一緒に食べたらどうだ」と言ってくれた。

しかし、傍でそれを聞いているおかみさんは、そ知らぬふりをした。主人は、また声をかけてくれた。それでもおかみさんは黙っていた。そのとき少年は、思わず「私は牛肉は嫌いです」と言ってしまったのである。それは嘘であった。しかし、少年は、その嘘を真実にしようと決心した。少年は、今後いっさい牛肉を食べないことを心に決める。翁は、それ以来終生、牛肉およびそれを材料にした料理には、箸をつけることをしなかったのである。

翁は、この厚岸で丁稚奉公しながら青年期を迎える。その胸のうちには、徐々に向学心が芽生え、やがて燃えさかる。翁は、北海道にあきたらず雄図を抱いて東京へ向う。17 才（明治 39 年）のときのことである。しかし、上京して翁が目のあたりに見たものは、必ずしも明るいものばかりではなかったらしい。東京にいる知人たちの挫折と堕落した生活、そして基礎教育のないものの前途を阻む壁の容易ならぬ厚さ。翁は、未来に対する新たな不安を感じ、東京における苦学をあきらめようとする。そうしたやさきに、翁は、当時の三井物産の大立者山本条太郎なる人物（後の政友会幹事長、南満州鉄道社長）のいることを知るのである。山本条太郎氏は、三井物産へ 16 才で入り、下から叩き上げて同物産の理事（後に常務取締役）になった苦学力行の人物であると聞き、暗夜に光明を見出した思いがした。そして翁は、自分も三井物産へ入りたいと考え、それへ入る機会をつかむために、当分東京へとどまることにした。しかし、その頃の翁が、東京でどんな生活をしていたのか、さだかではない。或は何処かへ奉公していたのではないかと思われるふしがある。その間、三井物産本社を幾度か訪れ、給仕として採用してくれるように熱心に働きかけた。しかし、そのねがいは、その都度断られた。三井物産に入ることが絶望と知ったとき、「私は、猫になってでも「三井」へもぐり込みたいと思った」と、翁は、当時のせつなかった心情を語られたことがある。三井物産をあきらめた翁は、「三越」へ入ろうと思い、働きかけたが、これも保証人がいなければ駄目だと断られた。

望みがすべて潰えた翁は、再び北海道へ帰ることになる。逃げるようにして東京をたち、3 日 3 晩、飲まず食わずで青森まで行きつき、どうしようもない空腹を満たすために、青森駅で腹いっぱいに水を飲んだ。やがて北海道へ渡り、厚岸へたどりつく。その後間もなく、三井物産木材部の木材搬出業務を請負う店へ店員として雇われることになった。月給 5 円を貰う。翁は、この店で 19 才から 21 才までを過すのである。しかし、この店でひと悶着を起す。この請負業者が枕木

何万本かを伐り出す予定で山林の伐採を請負ったとき、翁は、山の状況がどうも予想されている量より少ないように思った。そこで、自分で立木を1本、1本調査してみた。その結果、枕木本数の見込は、予想の半分くらいしかないことが判った。翁は、それを直ちに主人に話したが、店の先輩たちからは、素人の若造のくせに生意気なことをいうなと逆にどやしつけられた。翁は、憤懣やるかたなく、またこんな話のわからない所に何時まで居ても致し方がないと考え、そこをとび出してしまったのである。当時翁は、既に21才になっていたので、これを機会に自ら志願して旭川歩兵第27連隊に入隊した。明治43年12月のことである。

軍隊へ入った翁は、連隊一の成績をあげる。体は大きく頑健そのもの、行動は敏捷で頭脳は明晰、演習でも学科でも木原二等兵の右に出るものはなかったという。木原二等兵は、大正2年この連隊最右翼の伍長勤務上等兵として除隊する。このようなとび抜けた優秀さが却って憎まれて、在隊中は、意地の悪い古年兵に何かにつけて殴られた。口惜しさをこらえていた翁は、一日も早く昇進してその古年兵を殴り返してやろうと思っていたが、残念にもそれに至るまでに相手が先に除隊してしまったという。翁は、その当時のことを偲んで笑っておられたことがある。尤も翁は、この連隊で永峯という少尉には可愛がられた。この人は、後に四国の善通寺師団長になり、その後も長く交誼が続いたようである。

除隊後、大正3年2月、翁は、25才で樺太へ渡り、大泊町の漁業兼海産物商に就職した。年間70円の手当を貰って、夏は漁場で帳付、冬は木樵として山で働いた。その翌々年の大正5年11月には、王子製紙のパルプ原木造材の請負業を手広くやっていた大倉造材所（大泊郡千歳村中里）に職をかえ、そこで山頭となった。翁は、この造材所で力一杯の仕事をしたらしい。その頃王子製紙のパルプ原木造材の監督をしていた人の話によると、翁は、当時から非常に仕事に対する才に長けていた人だったそうである。従って、手掛けた仕事は、常に成功した。また、通常は4人も5人も人手を要する仕事を、翁は、常に1人でやりとげたという。その後大倉造材所は、業績が急速に伸びて、間もなく樺太1、2の造材業者に成長してしまった。翁は、この造材所で造材事業に関する仕事の基礎を身につけ、この事業に対する自信を持つようになったのである。

翁が、夫人ヨシさんと結婚されたのは、この造材所に勤めていた大正7年のことであり、翁29才、ヨシさん25才のときである。ヨシ夫人は、北海道の人である。ここから木原御夫婦の新しい生活が始まるのである。ヨシさんは、翁が寝

泊りしている飯場へ自分も寝泊りし、人夫達の食事の世話を引受ける等献身的に働いた。しかし、生活は貧しかった。その頃翁の祖母は、愛知県河和村に未だ御存命であったので、翁は、当時 13 円の給料のうちから 5 円を毎月祖母に仕送りしていた。そうした生活の中で、木原御夫婦は、それこそ爪に火をともすようにして貯金を始めていたのである。従って、「かねを溜めたい一心の私は、ときには祖母への仕送りを知っていながら怠けることがあった。そうしたとき家内は、私に黙って四里の道を歩いて往復し、祖母にかねを送ってくれた。」と翁はいわれる。

結婚後 6 年目、大正 13 年 11 月 28 日、翁は、金 6 千円を元手にして独立し、王子製紙のパルプ原木造材の請負業を始めた（大泊郡大泊町字古牧露助沢山林）。35 才のときである。その後間もなく、この請負業はやめて、国有林から直接立木の払下げを受ける事業に切り替え、昭和 4 年に始めて自分の手で内地へ木材を積み出した。この最初の売先は、名古屋の業者であった。愛知県は翁の古里であり、祖母の法要の都合もあったので右の売掛代金の取立てに、翁は、ヨシ夫人を伴い、最初の事業の成功を喜びつつ、樺太から名古屋へ出掛けることにした。しかし、代金取立ての方はかなり難航したらしい。相手方の理不尽に腹をたてながらも、結局、金額を半分にまけてやって結着をつけざるをえなかったそうである。回収した代金を持った木原御夫婦は、知多半島河和村の祖母の墓地を訪れ、そこへ墓を建てた。その帰路豊川稲荷（妙厳寺）に参詣し、ここへ多額の寄附をした。この豊川稲荷への寄附には、翁の少年時代からの宿願があったのである。

翁が 14 才で北海道へ丁稚奉公に出るとき、豊川稲荷へお参りをした。そのとき翁は、持ち合わせが乏しかったので大きな蝋燭が買えなかった。小さい蝋燭を買ってお燈明をあげた翁は、「自分が将来出世したら必らずお返しをしますから、今日はこの小さい蝋燭でこらえて下さい」と心のなかでいったという。いまは、名古屋で木材代金を回収してかねを持っている。

そこで、子供の頃、心に誓ったお返しをするために、この豊川さんには出来るだけの寄附をすることを思い立ち、5 千円という大金を寄附したのである。当時 5 千円といえば、家が何軒も建てられた金額である。寄附をしたあと御夫婦は、名古屋駅前の「支那忠」という旅館に泊っていると、そこえ豊川稲荷（妙厳寺）で前記寄附を受付けた僧侶が訪ねてきて、御寄附を頂いたにもかかわらずあまりにも高額なので、つい 5 百円と勘違いして、そのように記帳したが、夜になって会

計をしめてみると現金が 4 千 5 百円多過ぎるので、さてはあのときの寄附は、やはり 5 千円であったのかと、お詫びかたがた確めに来たとのことであった。そのとき、ヨシ夫人は、翁に向って「お婆さんの墓も出来たことだし、あとは京都の寺参りと帰りの費用さえあればいいんですから、その分だけとっておいて、残りのおかねは、いっそのこと全部豊川さんへ寄附してしまったらどうでしょう。」と言われた。木材代金は半分しか回収できず、残りのかねは、大切な今後の事業資金であったが、翁は、夫人の言葉に同意して、右の 5 千円のうえに残りのかねもすべて訪ねてきた僧侶に寄附してしまったという。この豊川稲荷に対しては、戦後、翁が神戸へ疎開してからも前記「小さい蝋燭」のお返しの続きとして、大きい燈籠を寄附している。銅 8 千貫の大燈籠である。

しかしその後、翁の造材事業は、順調に進んでいたわけではない。苦難を乗り越えながら進められていったのである。船で内地へ積出すために、海岸に木材が山積みされていたときのことである。翁は、60 人程の人夫を指揮して積出しの準備をしていた。沖には既に 4 隻の輸送船が停泊しており、艀が木材を曳航してくるのを待っていた。ところが、オホーツク海から押し寄せてきた流氷が、海岸から 4 粁沖の輸送船までの海面をすべて厚い氷で閉ざしてしまったのである。そうした状態が 1 週間も続いた。日を追って滞船料がかさみ、それだけ負担が増えていく。そうした状態がさらに続けば、翁は、倒産を免れえない状況に追いこまれていた。翁は、人夫頭を集めて打開策を協議した。しかし名案は出ない。そのとき翁は、座して倒産を待つよりは、1 本でもいいから木材を船積みしよう、それで倒産するなら、それも致し方があるまいと覚悟を決めた。そこで、総力をあげて鋸で氷を切り、本船までの氷原に巾 1 米の切れ目を入れることを提案した。この提案には、誰も賛成しなかった。氷を切ってもそれを排除することが出来ないからである。しかし、翁は、これを強行した。本船までの氷原に、長さ 4 粁におよぶ氷の切れ目が出来た。その夜、山からの強風が吹き荒び、切れ目を入れられた氷がぶつかり会って氷盤が壊れ、本船に至るまでの海面が、あたかも氷原の中の池のように開けた。艀は動き始めた。海岸に山積みされていた木材は、艀に曳航されて本船へ送り込むことができた。積出しは、成功したのである。人事を尽くして天命を待つということであろうか。翁は、どんな苦境に立たされても、「困った」ということを言ったことのない人だった。どんな状況の下にあっても、そこでなしうる最善を尽した。そして天命を待ったのかもしれない。

翁は、こういわれたことがある。私達夫婦は、神仏を深く信心している。だから私達が懸命に努力したことに対しては、これまでに神仏の加護があったと。事実ヨシ夫人は、晩年の入院生活の期間を除けば、生涯を通じて、朝は必ず4時に起き、一家の無事と繁栄を神仏に祈ることを欠かさなかったいう。

昭和9年、翁は、木材業者として新分野を開いた。すなわちソ連領から25万石の木材を買い入れて、これを内地および大連、青島（共に中国領）へ積出すに至った。45才のときである。同年における翁の樺太からの木材積出材積は百万石を越え、翁は、わが国の木材業者として有数の地位を確立した。他方、同じ9年12月、株式会社木原商店（資本金500万円）を樺太大泊町に創設して社長となり、初めて内地の岩手県に山林を買った。これを契機として、つぎつぎと内地20県に山林を買い、これまでの木材業から一歩進んで林業経営に乗り出している。次いで、昭和10年4月、木原商船鉱業株式会社（資本金750万円）を東京市麹町区丸の内に設立して社長となり、夏期は樺太、内地間の木材の輸送に当り、冬期は北海道炭鉱汽船、三井物産、三菱商事等の北海道、内地間の石炭輸送に当った。さらに樺太名好郡に石炭採掘業を開始する等石炭その他70鉱区の鉱山を所有した。さらに同13年8月、株式会社樺太機械製作所を樺太豊原市に設立して社長となり、同15年6月、樺太公用材協会が設立された際には、おされてその会長に就任している。また同16年3月、東京市市ヶ谷砂土原町に木原商事株式会社を設立して社長に就任している。以上のように、翁は、各事業部門に互って、着々と地歩を固め、その活動も樺太、内地、外地と範囲を拡げていった。わけても樺太においては、時代の寵児とまで言われた程その活躍には目ざましいものがあった。

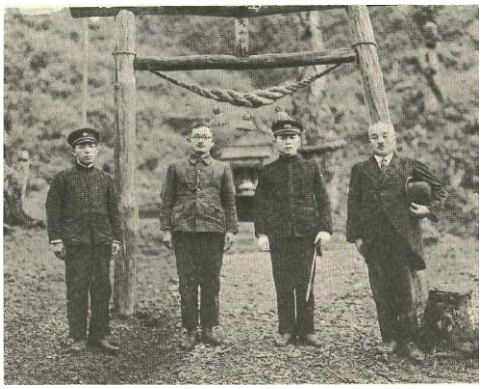
他方において、この時期は、樺太の木材業が、一つの壁に突き当たっていた時

期でもあった。昭和9年に遡るが、王子製紙の社長であり、貴族院議員でもあった藤原銀次郎氏を中心とする人々が、樺太における木材乱伐を防ぐことを理由として、パルプ材以外は島外輸出を禁止する法案を準備し、やがてこれが成立し、施行されるに至った。このことが、翁のこれまでの樺太を中心とする木材事業に重要な転機を与えたのである。前述したように、翁は、昭和9年を境に内地に山林を買い求め、新たに林業経営に歩を進めると共に、東京その他に新たに各種の会社を設立して、事業の多角的経営に踏み出しているのである。

その頃木原家には、一女が成長しており、家庭は平穏に包まれていた。しかし、昭和16年から始まった太平洋戦争は、例外なく翁の生活も根底から揺り動かした。翁所有の船舶は、軍に徴用されてすべて沈没し、しかも戦時補償は打ち切られた。また、すべての鉱区も失われ、樺太における数億の投資も無に帰した。あまつさえ船舶の乗組員に対する弔慰金は、翁が全額を負担した。まさに惨憺たる敗戦であった。

翁にとって、このどん底ともいうべきときに、ヨシ夫人は、こう言われたという。「長男、次男を戦争の犠牲にした多くの人達のいることを思えば、船を沈められたぐらいのことは致し方がない。それより船の乗組員やその家族の人達はどうなっているのだろう」と。ヨシ夫人は、翁の事業については、殆ど表面に出ない人であったらしいが、内部では事業に助言をし、大きく貢献していたようである。翁は、困難な問題にぶつかると、よくヨシ夫人に意見を求め、その言葉に耳を傾けたといわれる。ヨシ夫人は、身を持するには、極めて質素な人であった。それが生活に余裕が出てきてからも変わらなかった。しかし他人に報いるには極めて厚く、贈物には一流品を以ってし、決して安物を使われなかったという。

昭和19年木原御夫妻は、三重県に疎開した。事業は、山林を中心に行なわれることとなる。昭和23年、59才のとき、翁は、東京の木原商船鉱業株式会社その他の会社を合併して、現在の木原造林株式会社を作りあげ、事業を林業1本に絞り、いよいよ木原造林の時代に入ることになるのである。事業の規模は全国に



拡がり、経営の基盤はますます強固となる。今日の木原造林株式会社の隆盛は、こうして築き上げられた。翁は、こう言われたことがある。「大きな仕事をするのに、いちいち他人の意見を聞い ていては何もできない。自分の思うとおり自分で決めるより致し方はない。」また言う。「大きな仕事をするのに、自分１人では何もできない。皆にやってもらうより致し方はない。だから皆を木原にしてしまうのだ」と。そこに翁の経営哲学の片鱗がうかがえるように思われる。内地へ移ってからの翁の仕事は、木材業から造林業に重点が移り、林業家として、木を愛し、山を育て、それを公共のために後へ残そうとする傾向が顕著になってくる。大規模な新植、保育が行なわれ、厖大な資金がそこへ投下される。「後世によい山林を残すことに、微力ながら自分の余生を注ごう」と、翁は、自分のまわりの人々に語っている。また、翁は、山をよくするために多くの林道を開設している。岩手、福島、三重、和歌山その他数県に延べ 122,000 米にも及ぶ林道を開いた。岩手県下伊郡岩泉町鼠入には、木材伐出および木炭製造のための林道を開設すると共に、小学校を建設してこれを地元へ寄附している（小学校の建設、寄附は、このほかに樺太、岡山、愛知県でも行なわれている。）。こうしたこともあって、昭和 17 年 5 月、宮内庁から久松侍従が、勅使として岩手県の山中の前記小学校と鼠入事業所へ、視察のため御差遣になられたことがある。

翁は、若いときから社会、公共に奉仕する考えを強く持っておられ、小学校の建設、林道の開設、社寺への寄進、罹災者の救助その他公共に対する奉仕をその時代、その時代に応じて広汎に行なってこられた。こうした奉仕の精神の底には、翁独自の深い想念が潜んでいるように思われる。若い時代に、東京における勉学を志しながら果し得なかった翁は、自分は無学の徒であるとよく言われる。また、世の多くの無学の徒は、無学なるが故に道徳をわきまえない。社会一般の道義の退廃の一因は、これら無学の徒の無智にも係わりがあると言われる。そして翁は、こう言われる。「私自身も亦その無学の徒の１人であって、これまでの長い人生の間には、知らず知らずのうちに他人に随分迷惑をかけてきたかもしれない。だ

から私は、世間の多くの人々から喜んでもらえる仕事をして、自分が知らずに犯していたかもしれない不道徳の所業を償いたいと思っているのだ」と。

翁は、事業も成功し、財もなした。社会に対しても出来る限り貢献するために努力もしてきた。しかし、大切なことが、未だ残されていた。それは、長年にわたって共に世の辛酸をなめてこられたヨシ夫人の労苦に対し、どのように報いるかということであった。翁は、ヨシ夫人のために家を建てることを考えた。場所は、東京都新宿区市ヶ谷砂土原町、白柄組で有名な徳川時代の旗本水野十郎左ヱ門の邸跡と伝えられる。その邸の前の坂が浄瑠璃坂である。この邸は敷地 1700 坪といわれ、昭和 37 年 6 月に完成し、ヨシ夫人の住まわれるところとなった。

こうしてヨシ夫人は、この大邸宅の主となったのであるが、その日常の生活は、樺太時代の勤倹節約の態度から一向に変らなかった。しかし、ヨシ夫人が、この邸に住まわれたのは、僅か半年にも満たない短い期間であった。邸が完成されたのが昭和 37 年 6 月、その年の秋ぐちからヨシ夫人は、血圧の不安定な日日に悩まされた。11 月に入った或る朝、ヨシ夫人は、急に腕の痺れをうったえ、直ちに近所の医師の診察を受けた。脳血栓だという。翌日ヨシ夫人は杏雲堂病院に入院した。ヨシ夫人は、邸を出られ 3 年半の間入院生活を続けられ、この邸へは 2 度と帰えることがなかった。翁は、その 3 年半の間ヨシ夫人の看護のために病院を訪れない日はなかった、と病院の看護婦長が話している。こうした手厚い看護が続けられたにもかかわらず、ヨシ夫人は、昭和 41 年 4 月 1 日の明方遂に亡くなられた。

ヨシ夫人の亡くなられた年の 9 月 15 日、翁は、仏門に入られた。「寿林院殿禅月崇雲上座」がその戒名であり、自分の名を豊次郎から崇雲と改めた。翁は、ヨシ夫人のなきがらを曹洞宗総本山である鶴見の総持寺に納め、また、ヨシ夫人が仏の加護を得られるようにと、この寺に山門建立の一式その他を寄進した。総持寺の現在の山門がそれである。

その後、翁は、木原家が今日あるのは、なきヨシ夫人のなみなみならぬ献身によるものであることを考え、己に施すことが薄く、世に報ることの厚かったヨシ夫人の志を末永く生かす方法として、この財団の設立を思いたったのである。財団の名称は、ヨシ夫人の戒名「栄林院殿豊室良光禅大姉」にちなんで、「木原営林大和事業財団」と定め、昭和 41 年 12 月 6 日設立され、翁は理事長に就任した。財団の事業は、木原理事長の基本精神の下に、地味ではあるが着実に実施さ

れてきた。しかし、昭和 49 年 4 月 24 日木原崇雲翁は、老衰のため亡くなられた。満 84 才であった。

「財団法人木原営林大和事業財団 10 年史」より転載